



Title	「信念」概念の再考：米国の保守福音派キリスト教徒について
Author(s)	丹羽，充
Citation	一橋社会科学，7：243-270
Issue Date	2009-08
Type	Departmental Bulletin Paper
Text Version	publisher
URL	http://doi.org/10.15057/17540
Right	

「信念」概念の再考

―米国の保守福音派キリスト教徒について

丹羽 充

一 はじめに

「ファンダメンタリスト」とも呼ばれる米国の「保守福音派キリスト教徒（以降C/Eと略記）」は、信心深く戦闘的な性格で知られている^{〔1〕}。聖書の物語を歴史的事実として受け止め、自らの信念を積極的かつ攻撃的に語るのである〔Marsden 1991, 2006〕^{〔2〕}。筆者の調査でもC/Eは自らの信念を頻繁に語っていた。また、「イスラム世界に新たな十字軍を送り出し、彼らを殲滅しなければならぬ」などと口にするなど、異教徒に対する敵対心を曝け出すのであった。

しかし、信心深いはずのC/Eの間では、語ったはずの信念に反することを平然と行う事例が多く観察される。例えば、「飲酒は悪だ」と言っておきながらもなんら悪びれるところなく飲酒をし、「敵を愛さなければならぬ」と口にしてはおきながらも何食わぬ顔で悪態をつく。本当に信じているのか。一体何を信じているのか。欺瞞に満ちた存在ではないか。

だが、このように体よくまとめてしまいう前に、彼らの矛盾を目の当たりにした際に抱く「本当に信じているのか」という違和感自体を対象化しながら、新たな理解可能性を探ることが順当であろう。本稿ではC/Eを事例として、他者を語るための分析概念である「信念」についての批判的検討を試みていく。

二 「信念」という問題

米国のC/Eについてはこれまで多くの研究が蓄積されているが、それらは歴史的・社会科学的研究の二種に大別される。歴史学的研究はC/Eの発生から現代に至るまでの動向を膨大な資料を基に分析している[バー一九八二: Marsden 1991, 2006]。これらの研究によれば保守的であるはずのC/Eも、個々の時代における社会的背景・圧力に応じて、社会とのかかわり方や教義解釈をも変化させてきたという。近年でも、例えばC/Eが進化論に対抗するために紡ぎ出す新たな創造論などについての研究が行われている。

一方、近年より盛んなのは社会科学研究である。その代表として、シカゴ大学の主導で行われた「ファンダメンタリズム・プロジェクト (The Fundamentalism Project)」を挙げることができる。このプロジェクトは多岐の分野に渡る研究者を動員し、C/Eを含めイスラム教やヒンドゥ教などの様々な「ファンダメンタリスト」について、彼らの生成を促す社会的背景、政治への影響、さらには彼らと周囲の人々や集団との関係などを比較分析するものであり、約三五〇〇ページに達する膨大な研究成果を挙げている。

このプロジェクトによれば「ファンダメンタリスト」の発生や動向は、「アイデンティティ・ポリティクス」として理解することができるという。例えば四冊目の報告書では、「ファンダメンタリスト」に対する次の見解が示

されている。

ファンダメンタリズムは、「世俗的近代に」囲い込まれた信者たちが彼ら自身の、あるいは集団としてのアイデンティティの確立を試みる戦略、若しくはその集合である [Marty, Martin E. & R. Scott Appleby 1994: 1 「」内筆者]。

アイデンティティ・ポリティクスは現在、「ファンダメンタリスト」の社会科学的研究のみならず歴史学的研究も含めて広く共有されるブランド・セオリーである。

しかし、これによって重大な問いが棚上げされる事態が起きている⁽⁴⁾。多くの研究が、「ファンダメンタリスト」たちの発生や動向を社会的・歴史的コンテクストに接続して説明することには腐心する一方で、彼らの諸実践そのもの、更にはそもそも信じるということがどういふことなのかという問いを放置してしまっているのである⁽⁵⁾。

しかし近年、こうした研究動向を批判的に検討し、信じるということに対して直接的に迫ろうという試みを人類学者によるC/E研究の一部に見ることができている。それはスーザン・ハーディングとヴィンセント・クラパンザーノによる研究である。例えばハーディングはこのように述べている。

社会科学の研究者や自称非信者は、「信念」について十分な理解が得られるまでに、それが如何なるものかということを知ることができるとなると、それに近づくことができている……適切な問いは、如何にして超自然的な秩序が現実のものとなり、知られ、経験され、また反駁できないものとなるのかというものである [Harding

2000: 36]。

信じるということそのものに立ち戻ろうとするこうした研究が、これまでの研究の限界を突破しようとする試みであることに間違いはない。

だが、ここでより根本的な問題に直面する。これまで本稿でも「信じる」という言葉を何気なく用いてきたが、果たしてこの言葉によってC/Eについての何が言われてきたのだろうか。「信じる」ということに直接的に迫ろうとするハーディングとクラパンザーノは、具体的に何に迫っているのだろうか。バイロン・グッドが言うように、「信念 (belief)」、およびその動詞形である「信じる (believe)」という概念は、「ワイトゲンシュタインの言う『半端仕事』言葉」の一つであり、あまり意識することなく使われることが多い」[Good 1994: 20]。この言葉は他者を語るための分析概念として頻繁に用いられるが、その内実は往々にして曖昧なままに放置されている。したがって、この言葉によって示され(得)る事柄がどのようなことなのか検討されなければならない。そこで本稿では、ハーディングとクラパンザーノの各々による「信念」概念の内実およびその可能性と限界を批判的に検討することを通して、特に宗教的文脈におけるこの概念の定式化を目指していく。

三 「精神の状態」としての「信念」

一節 スーザン・ハーディングの「信念」概念

C/Eは礼拝においてのみならず日常的に、社会問題、自らの生活や人生など様々なトピックについて語る。

彼らの語りは、聖書の物語やキリスト教教理に関係付けられており、特有のレトリックを持つ。スーザン・ハーディングは、こうしたC/Eの語りを主な対象として調査・研究を行う人類学者である。長年に渡ってC/E研究に従事してきたこの人類学者は、主著である『ジェリー・ファルウエルの書』[Harding 2000]の第一章に「語ることが信じること」というタイトル付し、「信じる」ということを次のように結論付けている。

…：聖霊があなたの心に働きかけることによって、あなたを悔悟へと導く。一旦救済されると、聖霊はあなたの声を引き受け、あなたを通して語り、あなたの生を改変する。福音を耳にする事は、他者の立場において信念を経験することを可能にしてくれるだろう。しかし、生成的な信念—あなたと、あなたのリアリティを変容させ、あなた自身になるような信念—は、語ることでもたまたまされない。語ることが信じることなのである [Harding 2000: 60]。

「語ることが信じること」という奇を衒ったようにも見えるこの力強いテーゼの内実は、どのように理解されるべきか。その鍵は、「語ることが信じること」の章の冒頭における「回心」、すなわちC/Eになることについての記述に見出すことができる。

まずはハーディングが言うところの「回心」について明確にすることから始めよう。

回心とは、新たな信者たちの超自然的な想像力を喚起するとともに、彼らが、聖書を生きたリアリティであると捉え、自らを聖書の一連の物語の中心に位置付けさせるようにする内面の変容である [Harding 2000: 34]。

「回心」とは、様々な出来事を聖書の物語に位置付け、それに即したりアリティを獲得するようになるための「内面の変容」であるという⁽⁶⁾。そして「内面の変容」がどう達成されるのかということについて、ハーディングは論を進める。

既に救済されている語り手の言語やそれに伴う世界の見方を、救済されていない者が自らの内的語りに流用することから、それ「回心」は始まる。語り手の言語、いやすでに聞き手の声にまで入り込んだ言語は、聞き手の精神を闘争の場に、聞き手を分裂した主体に変化させる。瞬時にたやすく、あるいは時間をかけた内的大混乱を伴うかも知れないが、救済の瞬間に聞き手は語り手となる。キリスト教徒の語りはある種の中心的、支配的、優勢的な場所に絡みつく。聞き手の精神のみならず、聞き手のアイデンティティまでも占領するのである [Harding 2000: 34 「」内筆者]。

ハーディングによれば「内面の変容」は「語り」という実践によって実現されるという。これが「語る」ことが信じること」というテーゼの内実である。それは、「語り」という実践による物語の獲得、すなわち様々な出来事を聖書の物語に位置付けて捉え、それに即したりアリティを獲得するようになるための「内面の変容」を指している。そしてハーディングは、「内面の変容」をもたらす「語り」という実践自体を、「信じる」こととするのである。

「語り」を実践することによって、出来事を物語に位置付けて捉えるようになったC/Eの事例として、ハーディングはキャンベル牧師のエピソードを持ち出す。過去に自らが操縦するクレーンの事故によって息子を殺め

てしまったことについてキャンベルが語る物語は、次のように理解することができるという。

キャンベルの物語はキリストの物語であり、アブラハムの物語である。アブラハムのような、さらには神自身のようなキャンベルは、計画に従い自らの息子を磔にしたのだ。しかし彼らの物語と同様に、キャンベルの物語も未完成である。何かを喪失した感覚に憑かれている。何故キャンベルの息子は死ななければならなかったのか。……誰のためにキャンベルの息子は死ななければならなかったのか。答えは、もちろんのもっと前の物語によって与えられている。彼は、私「ハーディング」のために死んだのだ。^⑦ ナラティブ通りに言えば、キャンベルは自らの息子を私のために磔にしたのである [Harding 2000: 56-57 「」内筆者]。

この件からはキャンベルが、まさに「聖書を生きたリアリティであると捉え、自らを聖書における一連の物語の中心に位置付け」ていることが窺える。

宗教の人類学的研究に並々ならぬ影響を誇るクリフォード・ギアツは、「信念」について次のように述べている。「『宗教的パースペクティブ』と呼ぶべきものを支える公理は、どこでもみな同じである。知ろうとする者はまず信じなければならぬ」 [Geertz 1973: 110]。ギアツは「信念」を「精神の状態」と捉えた上で、それを知識、さらには実践をもたらず前提条件と理解しているのである。^⑧

ところが、これまで見てきたように、ハーディングによれば「内面の変容」、すなわち「精神の状態」は知識や実践の前提条件などではなくむしろその産物である。そして、ハーディングはこうした実践自体を「信念」という言葉で捉えようとするのであった。このようなハーディングの「信念」概念は、「信念」を知識や実践をもたら

す前提条件として自明視することで問いを閉じてしまうギアツの限界を乗り越える試みだといえよう。

二節 「内面」という幽霊

こうしたハーディングの「信念」概念に依拠した場合、冒頭で挙げた「飲酒は悪だ」と言ってはおきながらもなんら悪びれることなく飲酒をし、「敵を愛さなければならぬ」と口にしてはおきながらも何食わぬ顔で悪態をつくなどの「矛盾」はどう理解され得るだろうか。筆者と友人のスローンとのやり取りを具体的事例として検討を行いたい。

スローンは、筆者の調査地であるマクミン郡において多くのキリスト教関係の活動に参加してきた、「良きキリスト教徒」として人々に知られる敬虔なC/Eである。スローンと筆者は深夜、ガソリンスタンドで軽食を購入していた。支払いを済ませ店外に出ると、一台のピックアップ・トラックが窓を開けながらわれわれに近づいてきた。トラックには一組の男女が乗っており、ドラッグかアルコールに酔っているかのように見えた。そして女性がわれわれを罵ったのである。

あなたたちがゲイではないことを祈っているわ。

トラックは急発進で走り去り、スローンと筆者は顔を見合わせて苦笑していた。しばらくするとスローンが次のように言う。

ああいう人間は嫌いだ。

筆者はすかさず問いかけた。

聖書によれば、他人を嫌ってはいけないのではないか。確か、キリスト教徒は敵を含めて全ての人を愛さなければならぬのではなかったか。

既に述べたようにスローンは敬虔なC/Eであり、「汝の敵を愛せ」などという基本的なドグマを知らないとは考えられない。沈黙の後、スローンはこのように主張した。

いや、彼らを嫌っているのではなく、彼らの行為を嫌っているんだ。

筆者は食い下がった。

しかし、君が言ったところでは、明らかに「嫌い」の目的語は「ああいう人間」だったはずだが。

ここにきてようやくスローンは自らの過ちを認めるに至る。

完璧なのはイエス・キリストのみだ。人間は罪深く完璧ではない。もちろんイエスを目指さなければならぬが。

これら一連のやり取りにおいて注目したいのは、筆者が指摘する矛盾について、スローンが追求を受けるまで気が付かなかつたという点である。そもそも聖書の物語やキリスト教教理について頻繁に「語る」ためか、それと実際の行為との矛盾はスローンのみならず、広くC/Eの間で観察される。そして多くが矛盾に無自覚のままに遂行されているように見えるのである。

ハーディングによればC/Eは、「内面の変容」によって「聖書を生きたリアリティであると捉え、自らを聖書における一連の物語の中心に位置付け」るはずである。だがC/Eが往々にして、自らが語る聖書の物語やキリスト教教理と実際の行為との矛盾に無自覚であるということは、「変容したはずの『内面』」が恒常的に機能していないことを示唆している。この点においてハーディングの「信念」に想定される「内面」は、どのような時にどう機能するのか条件付けられなければならない。またそれによってC/Eをどこまで説明できるのか検討されなければならない。

だがその前に、そもそも「信念」の背後に「内面」を想定すること自体を疑問に付すべきなのではなからうか。これまで「信念」は、往々にして何らかの「精神の状態」を指すものとして議論されてきた[Asad 1993]。ハーディングも、「信念」を「実践」を指すものとして用いてはいるものの、それが達成するものが何らかの「精神の状態」、ハーディングの言葉で言えば「内面の変容」であるということから、この系譜に位置付けられ得る。しかし、「精神の状態」として「信念」を捉え、人類学分析概念としてそれを定式化することにいち早く着手した口

ドニー・ニーダム [1972] は、膨大な歴史的・民族誌的資料を駆使しながらもそれが不可能であるという見解、さらにはそもそも「精神の状態」というものが分析対象として確立され得ないという結論に達している。

さらに、こうした研究の方向に対しての決定的な批判となるのはギルバート・ライルによる次の指摘である。日常言語の曖昧さを取り除こうと試みる日常言語学派に属するライルは、われわれの心にかんする言説に対して次のように述べている。

ある人が彼自身の心の特性を実際に働かせていると叙述される場合、われわれはその人の外部に現れた行為や実際の発話を結果としてもたらす隠れた挿話について叙述してはならず、むしろ、それらの外部に現れた行為や発話そのものについて叙述している [ライル二〇〇五：二三頁]。

われわれが観察することができるのは、故に心にかんする言説が示すことができているのは、心についての事柄ではなく、実際には「外部に現れた行為や発話」それ自体である。すなわち、実際に観察される他者の行為や発話の背後に「内面」を見ることは、観察者の恣意に他ならないというわけである。⁹⁾

観察可能性という点において「内面」を想定する議論はどうしても行き詰ってしまふ。そこで一旦「内面」から離れ、それとは関係なく「信念」概念を用いる方向を検討してみるべきであろう。¹⁰⁾

四 「信念」と「命題」

一節 ヴィンセント・クラパンザーノの「信念」概念

「信念」という分析概念を巡っては、それを「精神の状態」ではなく、命題に対する評価と規定する議論がいくつかある。⁽¹¹⁾例えば、浜本満は語用論の観点から「信念」を「知識」との対比のうちに分析し次のように述べている。

「SはPを信じている」はSがPに真という評価をあたえ、かつ話者が自分が所属する言説空間においてPを真と評価しない立場が存在すると判断しているというのと等価である。Sが話者と一致している場合、それは「私はPを信じる」という一人称の言明となり、一致しない場合「彼（彼女、S）はPを信じている」という三人称を主語とした言明となる〔浜本二〇〇七b：六五―六六頁〕。

端的には、「信じる」とは、ある言説空間⁽¹²⁾において常に真と評価されるわけではない命題を真と見なすことだとまとめられる。そして、検討すべきもう一つのC/E研究、ヴィンセント・クラパンザーノによる『言葉に捧げる』〔Crapanzano 2000〕において「信念」概念は、結論を先取りすればこの用法で用いられている。早速その内実を検討したい。

『言葉に捧げる』においてクラパンザーノは「信念」についてこのように述べている。

信念は問題含みの特性を持つ。われわれは自らの理解、力説点、思想、誓約の変化が、生涯という長い単位ではなく、会話などの短い単位でも起こっていることを認めなければならない……だが、われわれは、継続性として、志向性および参照点として、状況の偶然性や経験の即物性を貫くような信念の一定の安定的な性質についてもまた認めなければならない……テクストはその中心を具象化するものであって、それはファンダメンタリストにとつては聖書なのである [Crapanzano 2000: 34]。

右の引用の冒頭においてクラパンザーノは、「信念」を「自らの理解、力説点、思想、誓約」と表現している。「理解、力説点、思想、誓約」は、抱かれたり発話されたりする際の状況や目的という点で異なつてはいるものの、共通して何らかの「命題を真とみなすこと」として抽象¹³され得る。そして引用前半部においては、こうした「命題」が不安定な性格を持つということが述べられている。

だが一方で、引用中盤から終わりに掛けては、「命題」が一定の安定的な性格を持つことについても言及がなされている。そしてその中心には聖書があるというのである。

「命題」がこうした二重の性格を持つということはどうか。これを解き明かすための鍵は、クラパンザーノによるハーディング批判に見出すことができる。クラパンザーノは、C/Eが様々な出来事を聖書の物語に即して捉えているというハーディングの主張について、次のような見解を述べている。

ハーディングとは異なり、私にはファンダメンタリストがわれわれと同じように常に物語と出来事を分けて捉えているように思える。しかし、彼らにとつて一時にはわれわれにとつてもそれは好ましいことではないの

だ。ファンダメンタリストたちはこのような分離の原因に、人類の墮落、および自らの原罪のうちにあるその永続性を見るのである。……ファンダメンタリストは、しばしば物語を実際の出来事と分けて捉えていないような印象を与える。「だが」彼らは、情熱、行為、そして言葉の力によって没入しているように見える「だけな」のだ。彼らは熱を帯びた強力なレトリックの力を聞き手に及ぼすのだが、私の考えでは、それは彼ら自身にも向けられているのである [Crapanzano 2000: 165-166] 「内筆者」。

対象にアイロニーを認めるクラパンザーノによればC/Eは、ハーディングが主張するように「内面の変容」を経て、出来事を自動的に聖書の物語に位置付け、リアリティを獲得するようになっていくというわけではない。C/Eは出来事を、実際には聖書の物語とは分離して捉えている。そして出来事と物語の統合は、本来は出来事と物語の分離あつてはならないということから、なんらかのきつかけによって分離が自覚された際に聖書の物語に立ち返ることによって遂行的に実現されるのである。

「命題」の二重の性格に話を戻そう。既に示唆したようにC/Eの抱く「自らの理解、力説点、思想、誓約」の内容である「命題」、すなわち「信念」における「命題」は、実際には分離したまま捉えられてしまう出来事と聖書の物語を、なんらかのきつかけによって遂行的に統合した結果として創造されるものである。このように即興的に創造される「命題」が、忘却や、時とその場の状況および相互行為に起因する変化などの不安定な性格を持つていることは当然だといえる。しかし一方で、こうした「命題」が聖書の物語を参照しながら創造されるといふ点において一定の安定的な性格を持つていることもまた確かである。⁽⁴⁾これが「命題」の二重の性格の内実である。

『言葉に捧げる』においてクラパンザーノは、「信念」という概念によってC/Eのうちに特権的な「内面」や「精神の状態」を想定しないし、着目しようとしてもしない。「信念」を「命題を真とみなすこと」と捉え、また「命題」の不安定でありながらも安定的という二重の性格を考慮に入れた上で、それが遂行的に創造される状態にこそ着目するのである。クラパンザーノが想定する「信念」は、タラル・アサドの言葉を借りれば「世界内の構築行為」[Asad 1993: 47]なのである。

こうした「信念」概念に依拠すれば、ハーディングのそれに疑義を差し挟むこととなったC/Eの矛盾、つまり聖書の物語についての語りや知識と実際の彼らの行為との矛盾が上手く理解に収まる。C/Eが矛盾に満ちているかのように見えるのは、聖書の物語や過去の語りなどの彼らが従うべき「命題」を、「内面の変容」を通して先験的あるいは永続的なものとなっているかのように想定してしまうからである。しかし、クラパンザーノの「信念」概念に想定される「命題」は、状況依存的に創造され、変化し、さらには忘却可能性に満ちた不安定なものなのであって、そもそも矛盾を測定する基準として適用されるべきものではないのである。

二節 コンスタティブとパフォーマティブ

ところでクラパンザーノによる『言葉に捧げる』は、C/Eについてのエスノグラフィを作成することを目的として書かれたものではない。本来の目的は、C/Eと法律家の二者を事例として米国における支配的なテクスト解釈スタイルであるリテラリズム¹⁵⁾を批判的に検討することである。本書の結論部において、クラパンザーノはリテラリズムに対してこのように警笛を鳴らしている。

数年前、私は米国のリテラリズムについての発見を、リオデジャネイロの国立博物館の同僚たちに語ったことがある。すると一人が、何故私が宗教と法律のリテラリズムに限定しているのかを質問してきた。彼は、「私にとっては、われわれブラジル人にとっては、あなたたち米国人は全員リテラリストだよ」と言う。ぎよつとさせられた。私は、これまで研究してきたリテラリズムを重要だと思いつつ、しかしなにか特別なものとして扱ってきたようだ。そして、リテラリズムをきれいに閉じ込めたつもりになっていた。私は、リテラリズムがどれだけ広く、また権威的に米国の思考を支配しているのか、例えば文芸批評や科学のような普段われわれが思いも馳せないような領域にまで及んでいることに気づいていなかった [Crapanzano 2000: 343]。

だが、このように自らをも戒めるクラパンザーノ自身が、C/Eを分析する際、皮肉にもリテラリズムに似た態度を固持してしまっている。ここにクラパンザーノの「信念」概念の限界がある。

C/Eはカルヴィニズムに則して自らの救済の理由を神による「選び」だと言う。しかし、彼らは同時にそれを自らの意志で決断したことの帰結だとも言う。両者ともが救済をもたらす主人公となってしまうのである。クラパンザーノは、こうしたC/Eたちの救済物語に対してこのようなコメントを付している。

この「救済」物語は福音派キリスト教に内在する、曖昧さを反映している。一体誰がこの物語の英雄だというのだろうか……彼の運命は―選ばれているのかいないのか―既に決められているはずである。では、果たしてなぜ彼が英雄になることができるのだろうか。しかし、彼は英雄なのである [Crapanzano 2000: 33] 「内筆者」。

筆者も調査においてC/Eの救済物語の曖昧さについて聞き取りを試みたが、上手く理解に収めることができなかった。しかし次のようにも考えられる。この曖昧さはC/Eの語りの「コンスタティブ」¹⁶の次元に着目する視点に起因しているのだが、そもそもそれが分析対象であるC/Eに馴染まないのだけではないかと。¹⁷ワットはC/Eの礼拝に参加した際、次のような感想を抱いたという。

われわれの注意が、聖書のさまざまなパッセージに向けられるのは確かである……しかし、その夜は聖書の一行すらも読まれることがなかったばかりでなく、特定のパッセージの意味を考えることすらもなかった……われわれはそこに座り、約二〇分の説教の間、聖書の正しいページを開いていただけであつた……私は説教における男性の語りと、聖書の各章についての関係を見出すことができなかった [Watt 2002: 89]。

コンスタティブの次元に着目するのであれば、この礼拝は奇妙な集まりでしかない。ではこの礼拝を成立させる事柄とは何か。それは、「聖書に基づいているつもり」になって牧師は「語り」、会衆は「耳を傾ける」という「パフォーマティブ」の次元にこそあるのではないか。

こうした事例は決して奇抜なものではない。チベットのマニ車を持ち出すまでもなく、日本の読経を思い浮かべて欲しい。經典のコンスタティブの次元を重視して読経をするケースはごく稀である。殆どの人にとつてはまさに「読経をすること」それ自体、すなわち読経のパフォーマティブの次元が重要なのではないか。

パフォーマティブの次元に着目するならば、「信念」を、行為そのものを指す概念として用いる方向が見えてくる。「内面」を想定するハーディングとは異なり、文字通りの意味で「語ることが信じること」、「聖書を読むこと

が信じること」、「祈ることが信じること」なのである。一般化すれば「Xをすることが信じること」と定式化されるのである。

五 「行為」としての「信念」

一節 規則的な行為

だが、「Xをすることが信じること」というのは観察者の見立てに過ぎない。例えば読経は、殆どの場合「信じる」ために遂行されない。実際には読経によって、「先祖を慰める」、「死者を弔う」などといったより具体的な行為が遂行されているのである。C/Eも同様に、例えば「語ること」によって「他者を救済する（布教）」、「祈ること」によって「神に感謝する」、「聖書を読むこと」によって「神の教えを学ぶ」などの行為を遂行しているのではないか。つまり行為者は、「Xをすることが信じること」ではなく、「XをすることがYをすること」という形で示される「規則」に従っていると考えられる。

しかし多くの場合、観察者は、行為者にとつての「XをすることがYをすること」という規則を容易に理解に収めることができない。なぜなら、一つ目の理由として規則が往々にして無根拠だからである。例えば、ルートヴィヒ・ウィトゲンシュタインは次のような思考実験を行っている。

私が何かに激怒しているとき、私は何度も杖で大地や木などを打つ。しかし、だからといって、大地に罪があるとか、それを打てばどうにかなる、と私が信じているわけではない。「私は当り散らしている。」そして、す

べての儀式はこの種のものである。このような行為は本能—行為と名づけることができる。—そして、たとえば、私が以前に、あるいは私の祖父たちが以前に大地を打つとどうにかなると信じていた、という歴史的説明はごまかしである、なぜならば、それは何も説明しない余計な仮定だからである。「ワイトゲンシュタイン二〇〇五・四〇九頁」。

ワイトゲンシュタインによれば、「杖で大地や木などを打つことが当り散らすこと」である。だが、「大地や木などを打つこと」が「当り散らすこと」になる根拠など存在せず、これに対する合理的理解は成立し得ない。また、行為者自身すらも規則の根拠など考えず、ただそのように行為するのである。⁽²¹⁾

観察者が行為者の採用する規則を容易に理解に収めることができな二つ目の理由として、そもそも「Y」の内実すら理解することができない場合が多いということが挙げられる。例えば、C/Eにとって「祈ることが神に感謝すること」だとしても、観察者は往々にして「Y」の部分である「神に感謝すること」がどういったことなのか理解できない。観察者にはC/Eが「祈る」ということしか分からないのである。だからこそ「Y」に「信じる」という言葉を置くのである。

まとめよう。「Xをすることが信じる」という定式化における「信じる」という言葉は、そのままでは理解困難なC/Eが従っているであろう様々な「XをすることがYをすること」という規則における多様な「Y」を包括する抽象概念である。それは、観察者が、行為者が採用する規則を彼らと同等の地平で理解することが難しいことから、論理の水準をずらして彼らを描くための概念なのである。

ところで、「Xをすることが信じる」といって、何を「信じる」となるのだろうかという疑問が残っ

ている。「神」か、「聖書」か、はたまた「キリスト教」なのか。それらしき対象、つまり目的語はいくつでもあ
る。だが、他者を描くためにわれわれの側が設定する分析概念においてこれを定めることは容易ではないし、定
めたとしても恣意を抜け出し得ないのではないか。²²⁾

二節 おわりに

これまでの議論を通して「信念」概念は、他者の（行為の）理解困難さを引き受けるためのものとして定式化
された。だが、この概念によって理解困難な他者の行為の全てを記述できるといっわけでもないだろう。例えば、
「家中で靴を脱がないこと」を「信じること」と記述することはどうも不自然に見える。

これは分析概念にとつては好ましいことだといえる。もしも「信念」概念が理解困難な他者の行為の全てを記
述できてしまうのであれば、逆に記述対象となる行為の特徴を何ら捉えていないことになるからである。しかし、
上記のようにこの概念が特定の行為にしか当てはまらないように見えるのであれば依然として検討に値する。今
後どのような行為の集合がどのような基準によって「信じる」と記述され得るのかということを明確化すること
が不可欠である。

ところで、当のC/Eも「信じる」という言葉を多用している。果たして彼ら自身はどのような行為の集合を
どのような基準によって、さらに何を「信じる」と規定しているのか。これまでの議論は、分析概念の検討とい
うことから、ライルやウイトゲンシュタインといった、敢えて言えば再帰的な言語哲学の成果を援用してきた。
しかし、C/Eが採用する「信念」概念に着目する際には、モーリス・ブロック [1989]、スタンレー・タンバイ
ア [1990]、浜本満 [二〇〇一]、近年ではアレクシー・ユルチャック [2006] など、ジョン・オースティンやジョ

ン・サールの言語哲学を異文化理解に活用する試みが参考になるだろう。

そしてこの問いに取り組むことで、単にC/Eにとつての「信じる」ということを明らかにするだけではなく、われわれの分析概念をさらに明確にできるのではないだろうか。分析者と当事者が用いる概念の間にあるずれや共通性を考慮に入れた上で、分析概念を鍛え上げることにつながるからである。

参照文献

ウイトゲンシュタイン、ルートヴィヒ

一九七五 『ウイトゲンシュタイン全集6』青色本・茶色本他』大森荘蔵・杖下隆英訳、大修館書店。

一九九七 『哲学的探求』読解』黒崎宏訳・解説、産業図書。

オースティン、ジョン

一九七八 『言語と行為』坂本百大訳、大修館書店。

サール、ジョン

一九八六 『言語行為…言語哲学への試論』坂本百大・土屋俊訳、勁草書房。

ジジエク、スラヴォイ

二〇〇六 『イデオロギーの崇高な対象』鈴木晶訳、河出書房新社。

島菌 進

二〇〇二 「ファンダメンタリズム」、『キリスト教辞典』、大貫隆・名取四郎・宮本久雄・百瀬文晃（編）、九

四五—九四六頁、岩波書店。

スベルベル、ダン

一九八四 『人類学とはなにか…その知的枠組みを問う』菅野盾樹訳、紀伊国屋書店。
バー、ジェイムズ

一九八二 『ファンダメンタリズム…その聖書解釈と教理』喜田川信・柳生望（他訳）、ヨルダン社。

浜本 満

二〇〇一 『秩序の方法』弘文堂。

二〇〇七a 「妖術と近代…三つの陥穽と新たな展望」、『呪術化するモダンティ…現代アフリカの宗教的実践から』、阿部年晴・小田亮・近藤英俊（編）、一一三—一五〇頁、風響社。

二〇〇七b 「他者の信念を記述すること」『九州大学大学院教育学研究紀要』二〇〇六、第九号、五三—七〇頁。

ライル、ギルバート

二〇〇五 『心』坂本百大・井上治子・服部裕幸訳、みすず書房。

Asad, Talal

1993 *Genealogies of Religion: Discipline and Reason of Power in Christianity and Islam*. Baltimore: Johns Hopkins University Press.

Bloch, Maurice

1989 *Ritual, History, and Power: Selected Papers in Anthropology*. London: Athlone.

Crapanzano, Vincent

- 2000 *Serving the Word: Literalism in America from the Pulpit to the Bench*. New York: The New Press.
Csordas, Thomas
- 1994 *Embodiment and Experiment*. New York: Cambridge University Press.
Harding, Susan Friend
- 1992 The Gospel of Giving: The Narrative Structure of a Sacrificial Economy. In *Vocabulary of Public Life: Empirical Essays Symbolic Structure*. R. Wuthnow (ed.), pp39-56. London: Routledge.
- 2000 *The Book of Jerry Falwell: Fundamentalism Language and Politics*. Princeton: Princeton University Press.
Geertz, Clifford
- 1973 *The Interpretation of Cultures*. New York: Basic Books.
- Good, Byron
- 1994 *Medicine, Rationality, and Experience: An Anthropological Perspective*. New York: Cambridge University Press.
Press.
- Marsden, George
- 1991 *Understanding Fundamentalism and Evangelicalism*. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co.
- 2006 *Fundamentalism and American Culture 2nd Edition*. New York: Oxford University Press.
- Marty, Martin E. & R. Scott Appleby
- 1994 Introduction. In *Accounting for Fundamentalisms: the Dynamic Character of Movements*. Marty, Martin E. & R. Scott Appleby (eds.), pp57-78. Chicago: University of Chicago Press.

Needham, Rodney

1972 *Belief, Language, and Experience*. Oxford: Basil Blackwell.

Tambiah, Stanley Jeyaraja

1990 *Magic, Science, Religion, and the Scope of Rationality*. New York: Cambridge University Press.

Watt, David Harrington

2002 *Bible-Carrying Christians: Conservative Protestants and Social Power*. New York: Oxford University Press.

Yurchak, Alexei

2006 *Everything Was Forever, Until It Was No More: The Last Soviet Generation*. Princeton: Princeton University Press.

参照ウェブサイト (二〇〇八年十二月十九日 アクセス確認)

浜本 満

二〇〇三 「他者の信念」

URL:<http://members.jcom.home.ne.jp/mi-hanamoto/research/fragmentary/belief.html>

- (1) ファンダメンタリストおよび福音派の研究に従事するマーズデン〔1991〕によれば、福音派の信念の特徴として次の点が挙げられる。すなわち、(1)聖書の権威を尊重し、(2)聖書に記録されている神の業を歴史的な事実だと捉え、

(3) 救済および永遠の生がキリストの贖罪に拠っていると考え、(4) 福音伝道の重要性を強調し、(5) 霊的変容を経た生を重視する、という。そして「ファンダメンタリスト」とはこうした福音派の戦闘的な勢力である [Marsden 1991, 2006; 島園 一〇〇一]。

ところで現在、「ファンダメンタリスト」という言葉は様々な分野に敷衍され、意味・ニュアンスが多様化してしまっている(例えば、経済学の「市場原理主義」などの言葉)。そこで本稿では「ファンダメンタリスト」という問題含みの用語を避け、「保守福音派キリスト教徒 (Conservative Evangelical)」という言葉を用いる。

(2) 具体的には米国南東部のテネシー州マクミン郡における、二〇〇六年八月から同年一〇月までの短期間のフィールドワークである。調査内容は、礼拝への参加、聖職者や一般信者への聞き取り、C/Eの家庭でのホームステイおよびその家族が経営する自動車部品会社での手伝いを通じた、彼らの日常の営みについてである。

(3) 「アイデンティティ・ポリティクス」の語り口は次の通りである。「近代化」とそれに伴う「世俗化」は、宗教を公共の場から追い出し、価値を相対化させ、人々のアイデンティティを崩壊させてきた。そしてこの状況に対抗するために、「ファンダメンタリスト」は発生しているという。

(4) 浜本満 [二〇〇七a] もアフリカにおける呪術研究を事例に同様の指摘を行っている。

(5) そもそも「アイデンティティ・ポリティクス」自体、疑わしい語り口ではないだろうか。人々が、宗教を「道具主義的」に、つまり「アイデンティティの確保」という目的を持った上で信じ、実践するということが果たしてあり得るのだろうか。

(6) 『ジェリー・ファルウエルの書』とは別の論文においてハーディングは、聖書の物語がC/Eにとってリアリティそのものを構成するようになることについて、次のような主張も行っている。「物語は、例えば予定調和的な感情・

経験・出来事・心理的な過程などの、ナラティブに付け加えるべきものについての手掛かりの体系などではない。それは、むしろ出来事、登場人物、語り手、感情、動機、そして道徳や神学的意味が、言語を通して生成される契機それ自体なのである」[Harding 1992: 43]。

(7) ここで想定されているのは、キリストが磔になることによって人類の罪が贖われたという物語である。

(8) アサド [1993] を参照のこと。

(9) 浜本満はライルと同様、心の観察不可能性を持ち出しながらニードムの議論について次のような批判を行っている。「ニードムの議論は、『信じること』つまり belief が、ある種の心的状態を指す言葉であるということを利用している。：他者の心の中身、心的状態について直接の知識を人が持ち得ない以上、なにも異文化や異言語を持ち出すまでもなく、他者の『信念』について語ることは必然的に常に大きな困難に直面せざるをえないのは、あたりまえだ」[浜本 二〇〇三：頁記載無し]。

(10) 「内面」を想定しない、行為遂行による主体の変容についての議論もある [Gordas 1994 など]。しかしまずは分析概念の定式化を目指そうと試みる本稿の議論は、これを扱う段階には至っていないため、今後の課題としたい。

(11) この方向で議論を行う論者に、浜本以外にはダン・スペルベル「一九八四」やバイロン・グッド [1994] などが挙げられる。スペルベルは、「信念」を「命題を真と見なすこと」と捉えた上で、「命題」の種類と合理性についての議論を展開している。グッドは「信念」概念の諸相を検討した上で、「命題を真と見なすこと」としての「信念」が人類学の主知主義的態度を確保するものであるとして批判的な議論を行っている。

(12) 浜本満「二〇〇一」によれば、人類学が明らかにするある社会の人々の「知識」を個々人に帰属させることはできない。社会の「知識」を完全に持ち合わせる個人など存在しないからである。だが「知識」を用いるのが個々人

であるということから、それを社会という抽象物に帰属させることもまた無意味である。そこで浜本は「知識」を、対象社会における人々のネットワークの中にこそ帰属していると捉え、このネットワーク空間を「言説空間」と名づけている。

(13) スベルベル「一九八四」を参照のこと。

(14) 聖書の物語をそのまま語るなどの場合、それは単に参照されるだけだともいえる。しかし実際にはそれも具体的な状況に埋め込まれた形で思い起こされ適用されるということから、「創造」という表現によって包括したい。

(15) リテラリズムとは、テキストが隱喩的に解釈されるべきではなく、字義通りに解釈されるべきだとする立場のことである。

(16) 「コンスタティブ（陳述）」と「パフォーマンスタイプ（行為）」という分析枠組みは、ジョン・オースティン「一九七八」によって確立されたものである。「コンスタティブ」とは文（発話）で記述・報告される内容を指し、「パフォーマンスタイプ」とはその文（発話）によって（を用いて）遂行されている行為を指す。

(17) 「語り」のコンスタティブの次元に執着するクラパンザーノの態度は、クラパンザーノ自身により批判的に検討されるリテラリズムに通じるところがある。

(18) マニ車とは、円筒の中に経文が入れられたものであり、信者はそれを回転させることによって功德を得ることができるといふものである。ジジエク「二〇〇六」によれば、それを回す際にどれだけ卑猥な考えを持っていようと、回すという「行為」によって折ったことになるという。

(19) 「XをしないことがYをすること」、「XをすることがYをしないこと」、あるいは「XをしないことがYをしないこと」など否定型を伴う規則もあるだろう。

(20) 「XをすることがYをすること」という発想は、ジョン・サール「一九八六」による構成的規則の概念に拠っている。

(21) ウイトゲンシュタインによれば規則に従うということは、例えば「私が規則に従うとき、私は選択をしない」「ウイトゲンシュタイン一九九七：一六七頁」、「私は規則に盲目的に従うのである」「ウイトゲンシュタイン一九九七：一六七頁」という件に表されるように、実践そのものでしかない。

(22) クラパンザーノとハーディングの両者とも「信念 (belief)」あるいは「信じること (believing)」を説明する際に特に目的語を定めていないが、これも同様の理由からだと考えられる。

〔学外研究者による査読を含む審査を経て、二〇〇九年五月十三日掲載決定、同年五月十九日掲載号決定〕

(一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程)